

肥料・農薬・資材はJAで

4. 水稲施肥基準(例)(10a当り) “品質・食味の向上は土づくりから”

肥料	10a当り:施肥量(kg(袋数))	施肥時期
肥土(土)	珪力燐(粒) 200kg(10袋)	9月~2月
標準基肥	農力アップ(粒) 100kg(5袋)	9月~2月
登熟向上	ソイルサブリエキス 約5kg(4L)	中干し後の最初の取水時
	けい酸加里プレミアム34(粒) 30~40kg(1.5~2袋)	出穂35~40日前
	マルチサポート1号 20~40kg(1~2袋)	出穂40日前
穂肥	NK化成4号 第1回 20kg	コシヒカリ 出穂18日前 その他品種 出穂7日前
	第2回 10kg	コシヒカリ 出穂20日前 その他品種 出穂23日前
基肥	グッド18045 20kg	コシヒカリ 出穂20日前
	20~30kg	その他品種 出穂23日前
基肥	コシヒカリ セラコート R845 40kg	代かき直前
	コシヒカリ セラコート R822 40kg	
一発	コシヒカリ けい酸加里セラコート R860 40kg	※この肥料は、基肥施用のみで、穂肥施用は基本的に不要です。
	コシヒカリ・キヌヒカリ 軽量らくだ君(15kg袋) 25~30kg	「軽量らくだ君」を使用される場合は、(味アップM(粒)等の施肥が重要)です。
	あきたこまち セラコート R592 35~40kg	
	キヌヒカリ エムコート022 40~50kg	「スマイルロング」は、天候・生育状況により、追肥が必要な場合がございます。
	みえのゆめ エムコート489 50kg	
	あきたこまち・コシヒカリ スマイルロング 45~55kg	

※側条施肥田植機の場合、基肥の施肥量を20~30%減らして下さい。
 ※穂肥は出穂直前の施肥や出穂後の実肥はタンパク含量を高め、食味を著しく損ないますので施肥しないで下さい。
 ※この施肥設計を参考にして、各自水田の土壌条件・慣行施肥・稲の生育等を十分検討の上、天候を考慮して施肥して下さい。
 ※転作(大豆、小麦等)跡圃場については、基肥窒素の施肥量を30~50%減らして下さい。

農薬は使用法・安全使用基準を必ず守り、周辺に飛散しないように使用しましょう。

種子は毎年全量更新しましょう。
栽培履歴を記載し「食の安全・安心」を守りましょう。

目標	良い苗を作る (稚苗栽培)	早く分けつさせる	無効分けつ防止	良い穂を作る (幼穂約1cm)	実りをよくする	土づくり
育苗の過程	播種	田植後1週間	田植後2週間	出穂35日前	出穂7日前	
主要品種別生育月日の参考目安	あきたこまち 3/25	4/15	4/22	4/29	5/17	5/26
	コシヒカリ 4/1	4/21	4/28	5/5	5/26	6/13
	キヌヒカリ 4/11	5/1	5/8	5/15	6/8	6/20
	みえのゆめ 4/11	5/1	5/8	5/15	6/10	6/26
作業メモ	()	()	()	()	()	()
水管管理	※健苗育成 育苗時に水をやりすぎない	田植直後は深水で、種いたみ防止	浅水で活着をよくし分けつ促進	間断かん水で根の健全化をはかる	浅水かん水	
主な作業とその要点	播種 土すきをする 育苗箱の消毒 育苗箱の消毒 育苗箱の消毒 育苗箱の消毒	田植直後は深水で、種いたみ防止	浅水で活着をよくし分けつ促進	間断かん水で根の健全化をはかる	浅水かん水	

1. 育苗の要点(稚苗) “健苗が豊作の第一歩”

種子更新	品質向上のため毎年全量種子更新をする。
塩水選	水20ℓに、食塩4kg(うち、2kg(もち)で行い、よく水洗いをする。
種子消毒	＜浸漬処理＞ 水20ℓに、(テクリドC 100cc(ばか苗病、もみ枯細菌病)混用) スミチオン乳剤 20cc(イネシロガレセンチュウ) 混用 10℃以上の水温で24時間、上記混用液で浸漬する。(特に風乾する必要はない) ＜温湯殺菌処理＞ 農業を使用せず、温湯により処理する方法です。尚、処理方法につきましては、最寄りの支店までご相談ください。※浸漬処理や温湯殺菌処理の他に塗布処理でも可能です。
種籾の浸種	10℃~15℃の水...10日~12日 低温時の浸種は十分にします。※1~2回水かえをする。
種籾の催芽	育苗器で、30~32℃でハト胸程度(1日程度)。
床土準備	くみあい粒状育苗培土(クリーン2号) 10a当り4袋 1箱当り3~4kg
播種	ハト胸催芽初1箱当り160g(1.6合)~180g(1.8合)以内とし、うす播きをする。
病害防除	苗立枯病:ナエファインフロアブル:2,000倍液又はタチガレエースM液剤:500倍液 1箱当り500ml(播種時)。 かび:ダコレート水和剤・500倍液、1箱当り500cc。(播種時~播種14日後まで)。 ムレ苗防止:フジワン粒剤、1箱当り50g(緑化始期)。
温度管理	出芽期 (2~3日) 30~32℃で発芽をそろえる。 緑化期 (3日) 昼温20~25℃、夜温15~20℃で苗の姿勢を決める。 硬化期 (15日) 昼温15~20℃、夜温10~15℃十分に換気し、葉のたれない苗をつくる。かん水は午前中に行い、夕方に表面が乾く程度とする。

※種子消毒や浸漬等の廃液は、河川や排水等に流さず適正に処理して下さい。

2. 除草剤散布 “水管管理で除草効果は決まる”

薬剤	剤名	3kg	5日後	10日後	15日後	20日後	30日後	出穂前
播種専用剤	モゲトン粒剤	3kg	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期
	クサエボン1号粒剤	1kg	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期
	エンペラー1号粒剤	1kg	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期
	ベンケイ1号粒剤	1kg	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期
	トップガンR1号粒剤	1kg	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期
	銀河1号粒剤	1kg	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期
	スラッシュ粒剤	3kg	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期
	エンペラー豆つぶ250	250g	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期
	クサエボンフロアブル	500ml	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期
	ブライオリチーフロアブル	500ml	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期
発芽専用剤	クサエボンジャンボ	400g	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期
	エンペラージャンボ	250g	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期
	トップガンジャンボ	250g	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期
	タンボパワージャンボ	500g	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期
	銀河ジャンボ	400g	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期
	エリジャン乳剤	300ml	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期
	サキドリEW	500ml	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期
	マーシェット1号粒剤	1kg	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期
	ワイドコアシロSD	200g	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期
	レラスジャンボ	400g	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期

※上表の印は除草剤の登録内容を記載しており、ご使用にあたっては、最速期印の最速期でのご使用をお願いします。

3. 病虫害防除 “出てあわてるよりも 先ず先制の予防対策”

区分	病虫害名	農薬名	施用量(10a当り)	本剤の使用回数	使用時期	備考
箱施用剤	いもち病、白葉枯病、ウンカ類、イネドコ、ヨコバイ等	ツインターボ箱粒剤08	50g/1箱	1回	播種前	※育苗箱の床土又は覆土に均一に混和する。
	いもち病、イネミズ、イネドコ、ウンカ類、ヨコバイ、メイチュウ、イナゴ類他	CSオリゼリディア箱粒剤	50g/1箱	1回	移植3日前~移植当日	※育苗箱の苗の上から均一に散布する。 ※茎葉の薬剤は払い落とすこと。 ※いもち病常発地帯は必ず施用してください。
本田施用剤	いもち病、紋枯病、イネミズ、イネドコ	CSオリゼリディアEV箱粒剤	50g/1箱	1回	移植7日前~移植当日	
	いもち病	サンプラス粒剤【予防効果】	3~4kg	1回	出穂5日前まで 但し、収穫30日前まで	※特に予防に心がける。
本田施用剤	いもち病	コラトップ豆つぶ【予防効果】	250g	2回以内	初発10日前~初発時 穂いもち: 出穂30日前~5日前まで	※散布後4~5日間は湿水状態を保つ。
	いもち病、紋枯病	オリブライ豆つぶ【予防・治療効果】	250g	1回	出穂10日前まで 但し、収穫45日前まで	※散布後4~5日間は湿水状態を保つ。
	いもち病、紋枯病、カメムシ類、ウンカ類、ヨコバイ、フタオビコヤガ他	ガッツスター粒剤【予防効果】	3kg	1回	出穂5日前まで 但し、収穫45日前まで	※散布後4~5日間は湿水状態を保つ。 ※カメムシ類の散布時期の目安 ①イネクロカメムシ: 6月上旬 ②斑点米カメムシ: 出穂10日~5日前(穂ばらみ期)又は出穂5日~10日後(穂揃期)~傾穂期)、多発時は出穂前後の2回散布
	いもち病、カメムシ類、ウンカ類、メイチュウ他	フジワンラップ粒剤【予防効果】	4kg	2回以内	収穫30日前まで	
本田施用剤	いもち病、紋枯病、カメムシ類、ウンカ類他	ワイドパンチ豆つぶ【予防・治療効果】	250g	1回	収穫35日前まで	
	カメムシ類、ウンカ類	キラップ粒剤	3kg	2回以内	収穫14日前まで	
本田施用剤	カメムシ類、ウンカ類、ヨコバイ	スタークル豆つぶ	250g	3回以内	収穫7日前まで	

※農薬の登録内容は随時変更されることがありますので、下記のアドレスのホームページで検索することが出来ます。
農薬登録情報 http://www.jppn.ne.jp/nouyaku/

乾燥・調製の要点

- 過乾燥の防止。仕上げ水分は14.5~15%を目標。(当地域の早期栽培は、乾燥終了後の余熱乾燥もあり仕上げ水分を高めに設定)
- 高温で急激な乾燥は避ける。平均の毎時乾燥率は0.8%を超えない。(胴割れ米の発生と食味劣化の防止)
- 自動水分計の精度は毎年始めにチェック。乾燥中もこまめに測定。
- 水分18%まで乾燥したら、数時間送風を止めムラを直し、その後乾燥再開。
- 調製は、粒温が常温に戻ってから。(粒温が高いと粒摺り時の肌ズレが多発)
- ゴムロール間隔は0.8~1.2mmが基準。脱ぶ率は80~85%を目標。
- ライスグレーダーの網目は1.85mm(L型)以上を使用。(整粒歩合80%以上とする)

ヒレタゴボウ対策

管内の水田にて「ヒレタゴボウ」という雑草が問題となっています。ヒレタゴボウは細地雑草のため、湛水している状態ではあまり発生しませんが、主に田面露出地点や、中干し時に発生が見られます。ヒレタゴボウは収穫まで長期間にわたり発生が続きませんが、中干し時は初中期~発除草剤の効果が発揮されるため、十分に防除するには初中期~発除草剤と中後期除草剤との体系処理が必要となります。詳しくは、予約申込書13ページの「ヒレタゴボウ対策について」をご確認ください。

白未熟粒軽減対策

- 登熟期の窒素栄養を高める
◎登熟期の栄養窒素が下がると白未熟粒が発生しやすくなります。
高温年は穂肥を多めに施用することが効果的です。
- 登熟期の高温対策
◎白未熟粒軽減対策として「水管管理」が重要です。穂揃い期までは湛水管理、登熟期間中は間断かん水を基本としながらも、できるだけ新鮮な水の供給を随時行うよう心がけましょう。

年間防除で被害軽減! ジャンボタニシ対策こよみ

活動期間	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
ジャンボタニシ活動期間	冬眠(気温14℃以下)											
稲を食べる期間(田植後2~3週間)	地域に広まってしまったジャンボタニシを完全に駆除することはほぼ不可能です。被害を最小限に抑えるために、防除しましょう!											
稲が生育している時には! 大切な3つのポイント	冬季には! 耕うんして貝を潰す!											
効果的な管理方法	①貝を水田に入れない	水口、水原に金網(1~2cmメッシュ)またはネット(9mm)を張る	①トラクターの走行速度を遅くする	特に水口、畦畔付近は密度が高いので丁寧に!								
	②貝を増やさない	貝・ピンク色の卵塊を潰して、駆除する	②回転数をできるだけ上げる									
	③貝に稲を食べさせない	4cm以下の浅水管理を行う	農業防除と併用するとより効果的です									